

八木奇峰と祇園祭八幡山

小寄
善通

八木奇峰と祇園祭八幡山

Title :

Yagi Kihou and Hachiman yama of Gion Matsuri Festival

Summary :

This paper is the introduction of documents proving that Yagi Kihou painted the sketch of Hachiman yama's metal fittings.

小奇 善通

京都祇園祭山鉾の装飾には、近世以降数多くの画家が関わってきたことが確認されている（註¹）。鉾本体に絵画が描かれる場合もあるが、その多くは懸装品や金具、木彫の下絵を描く場合である。本稿では、近江の湖北出身の画家である八木奇峰と八幡山との関係についてその詳細を探ってみたい。八幡山を飾る金具の多くが奇峰の下絵によるものであることは従来から指摘されてきたところであるが、その根拠となる文献を紹介することが本稿の主旨である。

八木奇峰について

八木奇峰（一八〇四～七六）は文化元年、近江国浅井郡下八木村（現長浜市下八木町）の弓削善左衛門の子として生まれている（註²）。画家として最初の師は当時長浜で活躍していた京狩野派の山縣岐鳳（一七七六～一八四七）であり、その後、京都では四条派の松村景文（一七七九～一八四三）に師事している。

近江における奇峰の代表作としては、長浜曳山祭孔雀山の舞台障子腰襖「芙蓉四十雀図」、同楽屋襖「紅葉鳩図」がつとに

著名であり、そのほか師景文の兄呉春の作風を彷彿とさせる慈栄寺（長浜市下八木）書院「田家図」襖絵八面や、竹生島宝厳寺「平経正図」絵馬（嘉永四年・一八五二）などが知られている。京都においては、弘化四年（一八四七）建造の桂宮家常御殿（現二条城本丸御殿）「萩図」障壁画や「糸桜に鶴図」及び「花車図」杉戸絵、安政二年（一八五五）建造の内裏御花御殿「四季海辺図」障壁画、同皇后御殿御常御殿「雨中竹図」障壁画などが知られている。以上の数少ない作品からの判断ではあるが、総じて濃彩の著色画は景文様であり、水墨及び淡彩画は呉春様を基にしているように思われる。

また、奇峰は『平安人物志』嘉永五年（一八五二）版では、画家（文人画を除く）の項百七人のうち七五番目、慶応三年（一八六七）版では、同じく七七人のうち四六番目に記載され、記載当時の居所は嘉永版は「新町三条南」、慶応版は「衣棚御池南」と記される。このほか奇峰は、安政二年（一八五五）刊行の『平安画家評判記』では第十五番目に「上々吉 六百両 八木奇峰 嵐三右衛門 此先生ハいつも御されいに出来升、御出精にて追々立物になられましょ」と記載され、嘉永四年（一八五二）刊行の『皇都開業名家對画集』では有力・中堅門弟に分類され、画技のランキング「神・妙・逸・能・奇」のうち妙が与えられている。いずれにせよ、江戸末期における近江出身の絵師として、禁裏御用を勤めるといふ高い評価を受けていた事実の特筆されてよい。

八幡山との関わり

京都祇園祭の八幡山を所有する三条町（中京区新町通三条下る）の古文書「三条町文書」に八木奇峰の名が認められる。それは同文書のうち京都市歴史資料館作成の目録に「八幡山諸道具等覚帳」とある古文書である。同書は表紙に「天保九戊戌六月 八幡山由緒書」とあり、次ページ冒頭には「八幡山飾物入記」等の記載がある。奇峰の名が出てくるのは、同書中、「寄進物調方控」とある部分以降である。「寄進物調方控」とある次には「武内弥右衛門 天保七申年 一幕縁木地並塗共」とあり、天保七年以降、八幡山の大規模な修復が行われたことが想定される。以下に、奇峰が登場する該当箇所を記載する（原文記載順）。文中（ ）内は本稿筆者による。

(1) 「一同（幕縁）金物鶴一式

但し八箇 七ツ

代金六拾九両也

（中略）

一金壹両三步五朱右下画料

八木奇峰

釜座御池上ル町

細工人 河原林秀興

御幸町姉小路上ル町

鋳師 鋳屋嘉兵衛

油小路二条下ル町

減金師 近江屋茂兵衛

押小路東洞院東へ入

彫物師 彦七

(2) 二 右幣(金幣) 諸人用左之通

一金 貳歩也 金物下画料

八木奇峰

(3) 二 金幣宵壯台

壹式

金物彫葵押合透し彫

代金五両也

(中略)

一金一分二朱 右画料

八木奇峰江

一金貳歩也 金物下画料

右同人江

(4) 二 見送り裾房掛金物七ツ

津留連いし彫

七条通新町東江入

鋳師尾張屋勘介

油小路二条下ル町

減金師近江屋茂兵衛

画師八木奇峰

代金拾両也

(5) 二 水引四角房掛金物

四ツ

東大寺八幡宮

所蔵移鞍紋

代金拾貳両也

細工人美濃屋治兵衛

(6) 二 下画師八木奇峰

長柄金物 素斜子 八ツ

金紋笹入 八ツ

メ十六

代金拾四両也

新町通御池上ル町

細工人釜屋与兵衛

下画師八木奇峰

一金五拾疋 右画料

現存する八幡山の諸金具等の意匠が奇峰の下絵になることは前記のとおり従来から指摘されていたが、その根拠となる文献はこれまで提示されてこなかった。この記録により、奇峰が天保期の八幡山修復にあたり、諸金具の下絵制作や金幣宵飾台の絵画制作など大きく寄与していたことが確認される。

本記録を現存するものと照合すると、(1)は「飛鶴文様欄縁飾金具」、(2)は「金幣」、(3)は「金幣宵飾台」、(4)は「靈芝文様見送房掛金具」、(5)は「花菱文様隅飾木彫金箔押」、(6)は「笹文様轆先金具」に各々該当する。因みに(3)の「金幣宵飾台」の絵画は、表面が紙本著色「双鳩図」、裏面が紙本墨画「鮎図」である。

奇峰が関わった金具等の詳細が判明することとともに画料や下画料の代金が記されている点も興味深い、ここに見られる記載から、奇峰に關してもう一点想定されることがある。それは、細工人や鋳師の場合と異なり、奇峰の該当箇所すべてに住所の記載が無いことである。奇峰は『平安人物志』の記載から嘉永五年（一八五二）には八幡山を所有する三条町に居住していたことが判明しているが、この「八幡山諸道具等覚帳」に住所記載がないことから、既にこの時期、奇峰は三条町に居住していたと考えられる。

ここでもう一点、刊行されたものではあるが近年の調査報告書を参考までに取り上げておきたい。昭和四六年に京都市文化観光局文化財保護課が刊行した『重要民俗資料 祇園祭山鉦由緒及びその附属品目録第二集』（以下、『由緒及びその附属品目録』）である。ここに掲載される八幡山の目録のなかに、「八幡山諸道具等覚帳」の奇峰関連記事に該当する金物等についての記載が認められるからである。『由緒及びその附属品目録』は現地調査において資料の内容や員数、箱書き墨書などを記したものであるが、八幡山の該当部分については残念ながら、どの

部分が箱書きの原文であるのかが、括弧書きにされていないため判断としない。以下に関連箇所を引用する（記載順）。

①花菱金物 四個

細工人 美濃屋治兵衛

下絵 八木奇峰

南都東大寺八幡宮所較紋写

寄進 江口新兵衛

天保八丁酉年六月吉辰

②金幣台 木製黒漆胡粉彩色 一個

鳩の絵 八木奇峰筆

寄附 高浜茂兵衛

中村嘉兵衛

高橋新助

天保七丙申曆 霜月吉祥日

③欄縁飾鶴文金物 八個

細工人 河原林秀興

鋳師 鋳屋嘉兵衛

彫物師 彦七

但し七ツ下絵 八木奇峰

寄進 乾 助治郎

天保九戊戌曆六月吉祥日

④見送裾飾房掛金物 靈芝文彫金房共 七個

鋳師 尾張屋勘助

滅金師 近江屋茂兵衛

下絵 八木奇峰

寄進 伊貝重左衛門

天保九戊戌曆六月吉朝

⑤ 幟先金物 笹金紋彫 八個

魚々子彫 八個

金具細工人 金屋与兵衛

八木奇峰 下絵

天保九戊戌年六月吉辰 町中

以上の両資料の記載は、(1)は③、(3)は②、(4)は④、(5)は①、(6)は⑤と対応する。(2)の金幣については、『由緒及びその附属品目録』に記載はあるものの、金具下絵画家に関する記載はない。また、『由緒及びその附属品目録』は箱書等の墨書を記載したものであるが、この資料からは「八幡山諸道具等覚帳」では確認できない制作年が判明する。すなわち、各々の記録によれば「飛鶴文様欄縁飾金具」は天保九年（一八三八）、「金幣」は天保八年、「金幣宵壮台」は天保七年、「靈芝文様見送房掛金具」は天保九年、「花菱文様隅飾木彫金箔押」は天保八年、「笹文様幟先金具」は天保九年である。

また、「八幡山諸道具等覚帳」の(1)に「金物鶴一式 但し八箇 七ツ」と意味不明の部分があるが、『由緒及びその附属品目録』によれば、「但し七ツ下絵 八木奇峰」とあり、八個の

うち七つが奇峰の下絵になることがわかる。

三条町は天保期の八幡山修復にあたり、目立つ部分の金具のデザインのほぼすべてを奇峰に委ねていることがわかる。八幡山の金具下絵等を奇峰が担当したのは彼の三〇代前半である。それ以前、天保四年（一八三三）には息子雲溪が誕生している。三条町に居所を構え、町内の人たちからも信頼され、画技にも一層の磨きがかかってきた頃合いだったのであろう。「金幣宵壮台」に描かれた「双鳩図」は小品ながら四条派の筆法で描かれた写実的な佳品である。鳩の羽毛の輝きをしっかりと再現したその技量には、当時の奇峰のひたむきな努力の跡と、彼のその後の活躍を十分に予想させるものがある。

註

1. 本稿筆者も以前に「祇園祭と京都画壇の画家―関連装飾品一覧―」（『成安造形大学学術活動報告』平成十六年度）としてまとめたことがある。
2. 八木奇峰の経歴については『八木奇峰と二人の師匠』（長浜城歴史博物館 平成二十一年 サンライズ出版）を参考にさせていただいた。



図1 八幡山宵山飾り

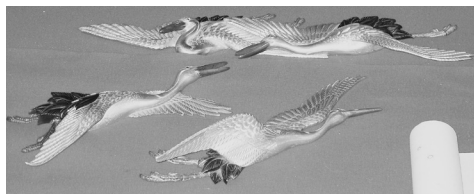


図2 「飛鶴文様欄縁飾金具」

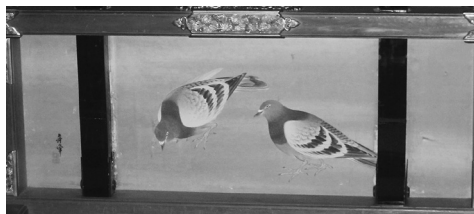


図3 「金幣宵荘台」

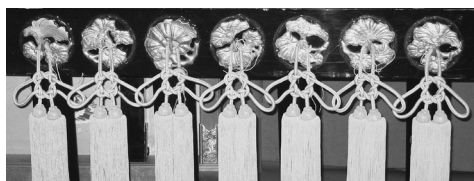


図4 「霊芝文様見送房掛金具」

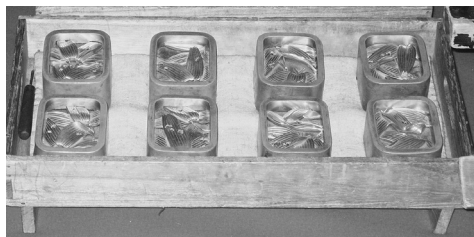


図5 「笹文様轆先金具」

追記 八木奇峰の漢字記載について「八幡山諸道具等覚帳」では「寄峯」、「由緒及びその附属品目録」では「寄峰」と原文では記載されているが、本論では一般によく用いられている「奇

峰」で統一した。

また、「三条町文書」は京都市歴史資料館所蔵の複写本を閲覧し、また、文書の解説にあたり、同館伊東宗裕氏のご教示を得た。記して感謝申し上げます。

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第4号

発行日 平成27年3月23日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 木村 至宏

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2015

ISSN 2186-6937